

創価学会を脱会し大きな功德が！



(平成五年・第十五回総会より)

私は平成三年十二月、主人と娘と共に創価学会を脱会し、妙観講(※法華講の一組織・以後「法華講」と表記)へ移籍させていただきまし

私の家では、父が東京・大田区にて「ともえ仏具店」という仏壇店を営んでおられますが、学会に関しては、そもそも戸田二代会長の頃から信心に励んできた父が、十数年前より「池田名誉会長の指導がおかしい」と言い始め、私自身も、池田先生を絶対と教える組織に不信感を抱き、仕事を理由に役職も受けずにいました。

そのような思いの中で、平成二年十二月の池田総講演頭解任を迎えましたので、「やはり、」と思うことはあっても、動揺はいたしませんでした。

しかし平成三年に入ると、皆さん御承知のとおり、創価学会は想像もしなかった方向へと進み始めました。仕事柄、店には末端学会員の人達が買い物に来ますが、その際、「過去帳は本当に二十万円になったのだからか」「お山へ行くと、後から請求書が来るのだろうか」また、「お山へ行つてはいけないう言われた」等々、いろいろな疑問や愚痴をこぼしていきま

門派だ」「ともえに行つてはいけない」との指示が流れはじめました。秋頃には、いまだ私達が脱会してないにも拘わらず、会合の席上で「ともえは脱会しました」との発表までなされました。

何という組織でしょう。創価学会の中で生きていくというならば、嘘を嘘と知ってはいけない、ということでしょう。

しかし、では自分自身が脱会できるかという点、情けない話ですが、「店を始めて十数年しか経っていないので、多額の借入れ金も残っており、今、学会を離れば生活が成り立たなくなってしまう」と思い、本当に悩ましました。

組織はウソ・デマばかり

いこともありました。毎日が苦しく、仏壇店という仕事を怨んだこともあり。そのような状態のとき、縁をいただき、年の暮れに法華講に入講させていただいたので、平成四年に入ってから、私は、父母と共に、同じ法華講で信心をしていってほしいと願うようになりました。それは、本部講習会に出席して、講師から御書の勉強を一時間四十五分にわたって教えていただき、感激したからです。学会の中では、御書は十分話ばかりでしたから、忘れていた信心を呼び起こされる思いでした。父母にも共に、大聖人様の仏法を、この法華講の中で正しく実践してい

てほしい、という思いが強くなつていきました。そして、三十二支区の古山さん、中森副指導部長、十一支区の永澤さん達の来店をいただき、この方達の姿を通じて、父も法華講に入講することを決心してくれたのです。

昨年の四月五日、講師に個人指導いただくことになった日、父の入講の報告をもつて伺うことができませんでした。その日は忘れもしません。坊にピストルが乱射される事件が起こった夜でした。講師は、次々に架かってくる電話に應對して、緊急事態の中にあつても、私の心の中を的確に読み取られ、御書の中から「法華経を信する人は冬のごとし、冬は必ず春となる」(新

編八三三六)という御金言を引いて、「たとえ今の仕事が目になつても、必ず御本尊様は他の道を開いてくださるのです。それを確信して正しい信心を貫かなければ、成仏はできないのです。大聖人様は「いまだ昔よりきかず・みず。冬の秋とあられる事を……」と仰せで

も聞かされた御文証でした。しかし私は、この御金言を耳で聞いても、信心では聞いておらず、冬の状態となるのを恐れていたのです。春が来ることを確信できずにいたのでした。

そのことに気付かされ、心の中がスッと軽くなつていくのが感じられました。四月二十五日、ともえ仏具店の家族・従業員全員は、創価学会に対し、堂々と脱会宣言をすることができました。

案の定、その日のうちに、店と住まいの廻りの、全ての組織に連絡が流されました。心は晴れ晴れとして、何とも言えない、すがすがしさを感しました。

「本日ただ今より、私達家族全員、日蓮正宗の法華講員として、法華講の中で、一からいえ、ゼロから大聖人様の仏法を教えていただきます。護法の人材に成長させてください」と、御本尊様に御祈念させていただきました。

その日より一年余、いやがらせの電話もありました。また、「ともえは潰れた」とか、「もうすぐ潰れる」とも言われました。組織をあげて「ともえ」に行くな、近寄るな」との

指示を徹底し、たまたま店に買い物に来てくれる学会員を見つけては、学会幹部が家庭訪問し、「行くな」と脅かしたりもしたそうです。

こうした組織ぐるみの営業妨害によって、私共で経営している二軒の店舗は、共に売上げが激減し、一つの店などは、それまで毎月一千万円からあった売上げが、八割減の二百万円にまで急激にダウンしました。それでいて、店を始めた時の借入金返済として、月々五百万円も返さなくてはならないため、一時は生命保険から借り入れて返済に当てる、という程の状況に追い込まれていきました。

我が身の信心の懦弱さを反省し、今日まで、信心根本に頑張りてきました。また、講師、副講師の御支援で、「妙観」「慧妙」に「ともえ仏具店」の広告を載せていただいたことから、他の寺院の信徒さんからも応援をいただき、中には東北の方から、広告を見て買いに来てくれる方までありました。

そして、皆様のおかげで、二店舗とも徐々に売上げを持ち直し、片方の店においては、学会問題が起きる前と変わらない売上げに回復、毎月五百万の返済も、何とか遅れず支払うことができるまでになりました。

今、我が家では、店に来る少ない学会員の方にも、堂々と日蓮正宗の正しい信心の在り方を話しています。

中には、泣きながら「お山に行きたい。学会を辞めたけれど、村八分が怖い」というお年寄りもいます。また、偽造写真を見せられ、ビックリして手も唇も震わせ、それでも認めようとせず、慌てて店を出ていった若い女子部もいました。

その姿のあまりの異様に、今日の自分が正しい信心につけたことを御本尊様に感謝申し上げると共に、池田教により、無明の闇に閉ざされている末端学会員の人達に、一人でも多く、真の大聖人様の仏法を知らせていこう、と決意いたしました。

まだまだ至らない私ですが、御法主日蓮上人宛下の御指南、小川御住職の御指導に従い、講師、副講師のもと、信心に、折伏に精進してまいります。

ありがとうございます。

連絡先
〇九〇—三三三—三三三三
http://toyoda.tv
power@toyoda.tv

私が身内の信心の懦弱さを反省し、今日まで、信心根本に頑張りてきました。また、講師、副講師の御支援で、「妙観」「慧妙」に「ともえ仏具店」の広告を載せていただいたことから、他の寺院の信徒さんからも応援をいただき、中には東北の方から、広告を見て買いに来てくれる方までありました。



本間 節子

私は、今から十二年程前、創価学会から法華講へと移籍いたしました。

家は学会でしたが、何も信心らしいことはしておらず、私が法華講に入って、信心に励むようになったこと自体が気に入らない、というような状態でした。

当時の私は、親元を離れて生活していましたが、母から「そろそろ実家へ戻って、結婚を考えるように」と、再三にわたって勧められるようになりました。

講中の先輩からは、「実家に戻り、あなたの信心が崩れてしまうのではないかと心配です」と忠告されましたが、いろいろ迷った末、私は田舎に帰ることにしました。

ところが、実家に戻ってみると、母からの、信心に対する凄まじい反対が待っていたのです。「勤行がうるさい」と言っている怒鳴り、母は、何かにつけて私の信心をやめさせようとしてきました。そして、そんなある日のこと、とうとう母は、勤行しようとしていた私の目の前で、御本尊様を御不敬してしまつたのです。止める余裕すらない、あつという間の、恐ろしいできごとでした。

講師に報告したところ、「とにかく、大変なことをしてしまつたのだから、まず、あなた自身が命懸けで信心し、懺悔していただくように」との御指導をいただきました。しかし、それにも拘わらず、信心微弱な私は、しばらく経つうちに謗法の恐ろしさも忘れ、信心を退転してしまつたのです。昭和六十年頃のことでした。

その後、母の勧めにより、今の主人と見合いをした私は、あろうことか、邪宗の神前で結婚式を挙げるといふ、大謗法まで犯してしまいました。

その後、子供もでき、何事もなく過ぎていくように見えたのですが、一年後、主人の母が癌にかかり、看病の甲斐なく亡くなってしまったので、義母の臨終の相は、

「人は臨終の時、地獄に墮つる者は黒色となる上、其の身重き事千引の石の如し」(新編一三九〇)という、御書に説かれているとおり、凄まじいもので、まさに地獄の相でした。

に火を尋ねるが如くなるべし。かなしはかなし」(新編一〇四〇)と仰せですが、謗法の家族を折伏せず、与同罪をこうむつていては、罪障消滅などできようはずがありません。

御不敬と退轉の罪を作つてから七年後の本年三月四日、六歳になる長女の由香利が、突然、夜中に高熱を出し、痙攣まで起こしてしまいました。あわてて救急病院に駆けつけたところ、その場で入院となり、検査をした結果、「肺炎と、熱からくる痙攣、さらには、CTスキャンで見ても脳にまでむくみが出ている」と診断されてしまったのです。

私は、どうしていいのかわからなくなり、ひたすら心の中で唱題を続けました。しかし、三日経つても娘の意識は戻りません。そして四日目に、病院から脳炎と肝機能障害であると診断され、緊急輸血をしましたが、その翌日には、急性腎不全を併発して尿が出なくなり、炎症も、脳から肝臓、肺、腎臓へと拡がって、ほとんど全身の機能が低下してしまい、今夜一晩が山であるう、と言われてしまいました。そして、今すぐ手術をせねば一晩もたない、と言われ、緊急手術を受けることとなったのです。

私は、絶望的な気持ちの中で、二時間半の手術中、ずっと御題目を唱え続けました。また、有り難くも、御秘符を頂戴することができ、深夜にも拘わらず、内山部長と浅賀班長に病院まで届けていただきました。

術後、主治医から、「手術自体はいちおう成功しました。それでも、良くして植物人間となるか、あるいは死亡するか、いずれかでしょう」と言われ、私は、もう娘はダメなんじゃないだろうか、と、またも絶望的な気持ちになつてしまいました。

ではいけません。講中の皆さんも祈ってくれているのよ」と励ましてくださったのです。

私は、こうした先輩方の御指導に、

「大地はさよはばつるゝとも、虚空をつなぐ者ありとも、潮のみちひぬ事ありとも、日は西より出づるとも、法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず」

（新編六三〇）との御金言を思い、三時間、四時間、そして一晩中、真剣に唱題し祈っていました。

そんな私に、創価学会員である主人の姉は、「そんなに祈ったって、良くなるどころか、悪くなるに決まってる。法華講をやめなさい」と言って、脱講届まで突きつけてきました。が、私は、学会の方を誤っていることを話し、「由香利は、私の信心で絶対に治してみせます」と言い切りました。

そして手術後三日目、意識のなかった娘が「うーうー」と声を出し始め、しばらくすると、看護婦さんの呼び掛けに、ゆっくりと自分の名前と年齢を言ったのです。医師は「信じられない！奇跡だ！」と言って驚きました。

私は、ありがたくて、すぐに御本尊様に御礼申し上げました。これも、御秘符を戴き、本山で当病平癒の御祈念をしていただいたおかげです。

その後、娘は、目に見えて、グングン良くなっていきました。しかし、一方、私が家で勤行していると、主人は「やめる、オヤジに見つかつたらどうする」と言って制止し、私が「由香利が良くなったのは、御本尊様のおかげなんです」と言うと、いきなり私の顔を殴りつけてきました。

また、主人の父が、娘に成田山の水を塗る、などと言い出しましたので、私は必死にそれを止め、**邪宗・謗法の恐ろしさ**を話していただきました。すると義父は、顔色を変え、「おまえなど、この家の嫁だとは思わない。孫はかわいいが、おまえなんか出て行け」と、怒り狂って言ってきました。その言葉に、私は、

「法華經を信する人は冬のごとし、冬は必ず春となる」（新編八三二）との御金言を思い起こし、「今、まさに、私は冬の状態なのだ。今は辛い、悪口を言われることで転重軽受でき、その功德で必ず子供も良くなるのだ！」との確信を深めることができました。

そして、病院では、必ず娘の耳元でお題目を唱えてあげ、時間がある、創価学会員の叔母に電話をしたり、手紙と一緒に『慧妙』を送ったりしていきました。

すると、どうでしょう、手術から一週間後には、娘は、腎機能、肝機能とも、ほとんど正常に近い状態にまで回復できたのです。言葉も話せるようになり、一人で歩けるようになって、四月二十二日、ついに無事退院することができました。（大拍手）

今では、元気に小学校へも通っています。つい、この前まで、生死の淵をさまよっていたのが、ウソのようでした。また、治療費も信じられないくらい安く、ほとんど部屋代と薬代くらいで、手術費の方も、高額費治療で免除される、ということ、入院から退院までにかかった総額は七万円程度でした。本当に御本尊様に守っていただけたのだと確信しています。

娘も「苦しかった時、お題目を唱えたよ」と言っています。本当に御本尊様は素晴らしい、**「医者に見放されても御本尊様は見放さないんだ！奇跡は必ず起きるのだ！」**と確信しました。

また、娘のために、猥下様、小川御住職様に当病平癒の御祈念をしていただき、また、講頭はじめ講中の皆さんに御祈念していただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

この御恩に報いるために、また、自らの罪障消滅のために、これからも主人や親戚、創価学会員を折伏して、一生懸命、信心に励んでいきたいと思えます。

どうもありがとうございます。その言葉に、私は、

うしたらよいか、そんなことばかり考え、「こうなったのもすべて母が悪いのだ」と思っていました。

そのような平成二年の暮れ、学会問題が起きたのです。

「創価学会は間違っている。このままでは総本山がたいへんな事になる」との主人の深刻な訴えにより、**家族全員で創価学会を脱会**し、妙観講という素晴らしい講に入講することができました。

そして、会合に参加し御指導を伺って、**学会時代の間違った信仰姿勢を正していくと、不思議なことに、母に対する自分の誤った心持ちも、振り返ることができるようになってきたのです。**

私は、「母に本当に幸せな老後を過ごしてもらいたい」と思い、御本尊様に御祈念申し上げ、兄弟達に相談を持ちかけてみました。

ところが、兄弟は全員、「母を過ごしてもらいたい」と思い、私達のように、**創価学会で信心**をしておりませんが、少し前までの私は、自分の母親を心底うとましく思う、という親不孝者でした。

というのも、私は、子供の頃から、将来、母の面倒を見るようにと、たえず母から言われて育ちました。私はいつの頃からか、「母は、自分の老後を見させるために私を育てているのではないか」と母親の愛情を疑うようになってしまったのです。

ある時、母が、兄が病気になるたといつて、看病に出かけたことがありました。しかし、私が流産して一ヶ月近く床に付いたときには、私の看病どころか、主人や子供の世話もしてもらえませんでした。何というひどい仕打ちだろう、と思いました。

て参加し、また次の年、総会が近づくと「連れて行ってもらえるなら行きたい」と言っておりました。私も、「なんとか母に、徐々にでも信心をキチンとさせなくては」と思っていたのですが、しかし、昨年一月十二日、その母が突然倒れ、意識不明の重病で病院に運び込まれてしまいました。

脳内出血で、本来なら命が無かったところ、母の場合、高齢のため、脳が収縮して空洞ができ、そこへ血が溜まったために、命を取り留める事ができたということでした。

しかし、医者からは、「四、五日が山だ」と言われ、意識のないままもがき苦しむ母の姿は、地獄そのものでした。

「ここで命を終えたら、この苦しみが、死後、永遠に続くのだ」と思うと、「このまま死なせることは絶対にできない、このまま死

なせたら、自分は一生悔いを残す、どんなことがあっても、**母を成仏させてあげなければ！」**と思いきや、倒れて数日後、一命を取り留めた母は、ありがたくも御秘符を頂戴し、猥下様に当病平癒の御祈念もしていただくことができました。

そして入院して七ヶ月目の八月五日、母は息を引き取りました。容態が急変する事もなく、病室の誰も気が付かないほどの眠るような臨終でした。

同室の付き添いさんが三名いたのですが、全員声を揃えて「**顔がものすごく白くて、皮膚もピンと張ってきれいだ**」と言っておりました。

生前、母は、色も浅黒く、老人であるということもあって、顔にはシミもたくさんありました。しかし、**臨終を迎えた母の顔色は白く、身体は柔らかく、眠っていて今にも眼を覚ますのではないかと**思うほど、穏やかな相でした。

御金言に

「善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる、又、軽き事鷲毛の如し」（御書二一九〇）と説かれる成仏の相そのものだったのです。

家に連れて帰り、枕経をあげ、一晩中お題目を唱え、母の身体に何度となく触りました。

翌日になっても、**身体には硬直も起こらず、臭いも無く、色も白**いままでした。

さらに、「成仏していれば、お棺の中にドライアイスを入れなくても臭いひとつ出ない」と聞き、「すべて御本尊様にお任せしよう」と御祈念していききました。

しかし、昨年は近年にない猛暑で、毎日のように四十度近い、観測史上最高という異常気象が続いていました。

そのような中で、母の遺体を安置し葬儀を行なう部屋にはクーラーも無く、信心の薄い私は、「一日も早く、少なくとも七日には絶対葬儀を出さなければ」と焦る気持ちでいっぱいになりました。

ところが、七日はこの末寺も法要の予定がいっぱいで、しかも、友引が入るため、葬儀は四日後の九日と決まったのです。

「善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる、又、軽き事鷲毛の如し」（御書二一九〇）と説かれる成仏の相そのものだったのです。

家に連れて帰り、枕経をあげ、一晩中お題目を唱え、母の身体に何度となく触りました。

翌日になっても、**身体には硬直も起こらず、臭いも無く、色も白**いままでした。

さらに、「成仏していれば、お棺の中にドライアイスを入れなくても臭いひとつ出ない」と聞き、「すべて御本尊様にお任せしよう」と御祈念していききました。

しかし、昨年は近年にない猛暑で、毎日のように四十度近い、観測史上最高という異常気象が続いていました。

そのような中で、母の遺体を安置し葬儀を行なう部屋にはクーラーも無く、信心の薄い私は、「一日も早く、少なくとも七日には絶対葬儀を出さなければ」と焦る気持ちでいっぱいになりました。

ところが、七日はこの末寺も法要の予定がいっぱいで、しかも、友引が入るため、葬儀は四日後の九日と決まったのです。

私には思わず岡野部長に、とんでもない暴言を言ってしまうました。主人に制止され、母の成仏不成仏がかかっている、もつとも大事な時に、御本尊様を信じきれない自分の弱さが、ただただ申し訳なく、御本尊様にお詫び申し上げます。今、母を亡くした悲しみはありますが、**無事に成仏させていただいた感動で胸がいっぱい**です。本当にまだまだ情弱な信心ではありませんが、今後さらに、猥下様、御住職様、講頭、また諸先輩方の御指導のもと、正しい信心を貫き、少しでもお役に立たせていただく決意です。

見事な成仏の相に大確信

「親不孝な自分が報恩の心に」

（平成七年第十七回総会より）

皆さん、こんにちは。三十三支区の見田村宮子です。昨年八月五日、私の母が八十二歳で他界しました。（法名「法秀妙照信女」）

本日は、母の臨終に際して、御本尊様より賜った有り難い御加護の体験を発表させていただきます。

私達の一家は、**創価学会で信心**をしておりましたが、少し前までの私は、自分の母親を心底うとましく思う、という親不孝者でした。

というのも、私は、子供の頃から、将来、母の面倒を見るようにと、たえず母から言われて育ちました。私はいつの頃からか、「母は、自分の老後を見させるために私を育てているのではないか」と母親の愛情を疑うようになってしまったのです。

ある時、母が、兄が病気になるたといつて、看病に出かけたことがありました。しかし、私が流産して一ヶ月近く床に付いたときには、私の看病どころか、主人や子供の世話もしてもらえませんでした。何というひどい仕打ちだろう、と思いました。

また、少しでも意見しようものなら、泣きじゃくり、まるで私が母をいじめてでもいるかのようになら、兄弟に電話を入れることも、しばしばでした。私はいつしか、**実の母親でありながら、顔も見たくない、身体に触れるだけで鳥肌が立つ、というくらい母を嫌うよう**になっていました。

「善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる、又、軽き事鷲毛の如し」（御書二一九〇）と説かれる成仏の相そのものだったのです。

家に連れて帰り、枕経をあげ、一晩中お題目を唱え、母の身体に何度となく触りました。

翌日になっても、**身体には硬直も起こらず、臭いも無く、色も白**いままでした。

さらに、「成仏していれば、お棺の中にドライアイスを入れなくても臭いひとつ出ない」と聞き、「すべて御本尊様にお任せしよう」と御祈念していききました。

しかし、昨年は近年にない猛暑で、毎日のように四十度近い、観測史上最高という異常気象が続いていました。

そのような中で、母の遺体を安置し葬儀を行なう部屋にはクーラーも無く、信心の薄い私は、「一日も早く、少なくとも七日には絶対葬儀を出さなければ」と焦る気持ちでいっぱいになりました。

ところが、七日はこの末寺も法要の予定がいっぱいで、しかも、友引が入るため、葬儀は四日後の九日と決まったのです。

私には思わず岡野部長に、とんでもない暴言を言ってしまうました。主人に制止され、母の成仏不成仏がかかっている、もつとも大事な時に、御本尊様を信じきれない自分の弱さが、ただただ申し訳なく、御本尊様にお詫び申し上げます。今、母を亡くした悲しみはありますが、**無事に成仏させていただいた感動で胸がいっぱい**です。本当にまだまだ情弱な信心ではありませんが、今後さらに、猥下様、御住職様、講頭、また諸先輩方の御指導のもと、正しい信心を貫き、少しでもお役に立たせていただく決意です。

★蒼碧集（暁鐘編集室発行）から